龍蔵寺　壇信徒の手引き

古佛眼山　龍蔵寺

龍蔵寺　壇信徒の手引き

古佛眼山　龍蔵寺

目次

第一章　龍蔵寺の教え　1

龍蔵寺のプロフィール

龍蔵寺の信仰（宗旨）

お釈迦様の教え

中道

四諦

八正道

諸行無常

法然上人の教え

専修念仏

阿弥陀仏の救済

第十八願

第二章　壇信徒の手引き　23

お寺はよろず相談所

開門時間
ご法事や葬儀のご相談
龍蔵寺会館のご利用申し込み
ご葬儀の準備
ご葬儀以降の法要・回忌法要
数珠
ご焼香
お仏壇のご用意
仏壇の新調・引っ越し
お墓について
お盆とお施餓鬼
お布施
第三章　壇信徒の十二ヶ月
定期・不定期に行われる行事
一月
二月
60

三月
四月
五月・六月
七月
八月
九月
十月・十一月
十二月
第四章　日常勤行　76

はじめに

このブックレットは龍蔵寺の壇信徒の皆様向けに、お寺との付きあい方をまとめたものです。お寺が作っていますので、少々手前勝手な内容があるかも知れませんが何卒ご容赦ください。

壇信徒とは檀家と信徒を合わせた言葉です。

檀家とはお寺のスポンサーのことで、一般にはお寺にお墓があるファミリーのことです。信徒とはお釈迦様や法然上人の教えを信じ、お寺にご縁があったり住職に帰依したりする方をいいます。まずは信徒になって、次第に縁を深めてお寺にお墓も有するような本格的なご縁になると檀家になります。実情は、檀家さんの中にも別の宗教を信仰される方もおられますのでもう少し複雑です。お寺に関係する全ての方に呼びかける場合、ここでは壇信徒とお呼びします。

檀家とは檀那家の略で、檀那とはインドの古い言葉、サンスクリット語の「ダーナ」を音写したものです。「ダーナ」とは「贈る」「与える」という意味です。つまり檀家とは「贈る人（家族）」「与える人（家族）」ということになります。仏道修行の第一は布施行（喜捨：他の人に喜びを与える行為の実践）ですので、すなわち檀家とは布施行を通じ仏道修行をする人や家族、ということにもなります。

このブックレットを手にされた方には、いやいやそんなプロセスは踏んでいないよ。とおっしゃる方も多いかと思いますが、そもそもはというと、こういうことになります。しかし現代の檀家制度というと、また違った説明になってきます。

現代の檀家制度は徳川家康が作ったものです。家康が生きた戦国時代というのは、死がすぐそばにあった時代ですから、信仰も大変盛り上がりました。特に浄土真宗は各地に寺を中心とするコミュニティーを形成し、加賀では一国を支配する強大な勢力にもなりました。比叡山などの有力寺院も荘園や通行料を通

じて経済を支配して強大な権力を持っていました。これらの勢力に苦しめられたのが、織田信長であり、その後継者である秀吉、家康だったわけです。家康も若い時に一向一揆に苦しめられ、宗教の結束力の怖さを思い知っていました。

家康が天下を握ると、このようにエネルギーがあった仏教勢力を懐柔しようとします。その政策が寺請制度というものです。お寺にお役所の機能を持たせ、全ての民衆がいずれかの寺の檀家になることを義務づけたのです。戸籍の管理や旅券の発行なども寺の役割となり、寺は安定した手数料収入を得られるようになります。また、貴族や一部の特権階級のみが行っていた回忌法要や墓の設置などを民衆にも広め、季節の付け届けなど細かい決まり事を習慣化しました。いずれもお寺を経済的に支援し、幕府に反抗しないようにするためのものです。この政策は見事に成功し、江戸時代には宗教がらみの反乱や抵抗はほとんど見られません。その一方で仏事や祭は民衆の暮らしの中に深く浸透し、江戸末期に日本を訪れた多くの外国人が驚いた、高度な倫理規範を持つ高い民度、芳醇な文化、そして豊かな信仰生活を実現したわけです。一方でこの寺請制度は、一部の僧侶

の堕落を生むことになります。この堕落への不信が、明治維新時の廃仏毀釈で爆発したともいわれています。

明治維新時、龍蔵寺では逆に廃仏毀釈で廃寺となった羽生の大聖院から山門などを買い取っています。関東でも廃仏毀釈の嵐が吹き荒れていましたが、龍蔵寺では壇信徒が団結し、境内の整備が進められていたわけです。このことを考えると、龍蔵寺と檀家の関係が非常に良く、当時の住職も尊敬されていたのではないかと思います。

龍蔵寺は平成二九年で建立六六二年目となります。家康が作った檀家制度は少しずつ形を変えながら、現在も寺を支える基盤として生きています。しかしその基盤も、三〇〇年近い家康以前の歴史の中で、龍蔵寺と壇信徒の皆様との間に築かれた信頼関係と信仰の上に建っているのだと思います。壇信徒の中には、まさにこの長い時間を寺と共にされてきた方々の子孫、ご家族も多くおられます。

寺を守る者としましては、このような歴史と、歴代住職が築いた壇信徒との信頼関係、信仰の伝統を守りながら、現在を生きる壇信徒の皆様と、私たちの寺・

龍蔵寺を創っていきたいと考えております。このブックレットもその一助になればと思います。

合掌

副住職　高口洋瑞

なおこのブックレットの内容は龍蔵寺のウェブサイトでも閲覧することができます。www.ryuzoji.jp

第一章　龍蔵寺の教え

龍蔵寺のプロフィール

寺の名前　無着山（古佛眼山）　龍光院　龍蔵寺

宗旨　仏教　浄土宗

創建　文和四年（室町時代　一三五五年）

開山（設立者）　教蔵上人

現住職　由木義文（第三十世）

住所　〒三四七―〇〇六八　埼玉県加須市大門町一八―五一

電　話　〇四八〇（六一）〇八五〇

ＦＡＸ　〇四八〇（六二）七九〇〇

Eメール　info@ryuzoji.jp　HP　www.ryuzoji.jp

日本の寺の名前は山号、院号、寺号のセットでできています。それぞれがあったりなかったりすることもあり、あまり厳密ではないようです。元々は、中国で寺は山にあることが多かったのでその山の名前をつけ、大きな寺では引退した僧侶が寺内に建てた小さな建物を院（あるいは庵）と呼んでいたようです。龍蔵寺は山の上にありませんし、寺内に院もありません。山号も院号も形式的と言えますが、その命名にはそれなりの意味を考えたようです。

無着山の無着は執着しないこと、つまり「空」を意味しますし、インド仏教の大スター、無着（世親の兄。唯識思想の大成者）と同名でもあります。寺号の龍蔵は創建の伝説にもある白龍（詳しくは『龍蔵寺の歴史』を参照ください。ＰＤＦ版をウェブサイトからダウンロードできます）を鎮めた場所という意味。院号の龍光は寺号の龍を取って、語呂が良くて格好よく、仏の偉大さの象徴でもある

光を組み合わせたのではないかとおもいます。実際にそういう院があったのかも知れません。

実は龍蔵寺のウェブサイトや封筒などでは、古仏眼山という山号を使っています。もともと寺宝として仏眼を持っていたのですが、住職が岩槻の浄国寺に移ったときに仏眼を持参し、以来浄国寺が仏眼山を名乗り、龍蔵寺は古仏眼山となったという訳です（諸説有り）。

龍蔵寺の信仰（宗旨）

龍蔵寺はお釈迦様の教え（仏教）、その中の浄土門の教えを特に重要視した（というか、それだけで良いと言いきった）法然上人の教えを広め、実践する道場です。壇信徒の中には別の信仰を持っているが、先祖代々の墓があるので、といった方から、無宗教だという方、あるいは毎日念仏を唱えているという方まで様々おられます。いずれにしても、ご自身あるいはご先祖様がどこかでお寺とご縁を

結び、現在に至っているのだと思います。お寺としてはそれぞれのご縁に応じ、また機に臨んで、壇信徒の皆様の日々の生活か充実し、安心したものになるよう、お力添えできればと思っております。

お釈迦様の教え

お釈迦様は今から約二五〇〇年前。現在のネパールに実在した修行僧です。王国の王子として生まれましたが、二九歳の時に地位を捨てて出家します。その後様々な師に教えを受け、自身で修行を重ね三五歳の時に悟りを開いたといわれています。悟りとは何か？　これを正確に説明できるほど私は修行が完成していませんが、おそらく宇宙の真理を理解し、真理に逆らわず自然に生きる術を修得されたのだと思います。それから八〇歳になるまで、お釈迦様は死ぬ直前まで約四五年間人々の指導を続けます。お釈迦様本人は記録を残さなかったので（キリストも同じですね。おそらく記憶力が抜群だったのでしょう）、死後に弟子が

聞いた内容をまとめました。それが「お経」と呼ばれる書物群です。記憶力に優れた弟子の阿難が多くを口述したことから、お経の冒頭には決まり文句として「如是我聞（私はこのように聞きました）」というフレーズがよく見られます。

キリストが布教を開始したのが三〇歳ごろ、磔にされたのが三三歳ごろと考えられていますので、布教期間は正味三年です。それが一冊の聖書にまとまっている訳ですから、四五年間布教し続けたお釈迦様のお経が膨大になるのも当然といえます。仏教が数々の流派・宗派に分かれているのも、長い布教期間の間に、相手に合わせて様々なお話をされ、それを後世の弟子達がそういった背景を省略して自分の好きな部分を選びとったためです。

お釈迦様の教えは非常に幅広く多岐にわたりますが、その根本は、

中道

四諦

八正道
諸行無常

の四つです。

中道

私の素性が坊さんだと分かると、結構な割合で「修行大変ですよね～、滝に打たれたりして」とよく言われます。そんなことはしませんと答えると、皆さんちょっと残念そうな顔をされます。お坊さんというと、そういう荒行の末に悟ることを目指すものと勘違いされているようです。実はお釈迦様もそういう修行を随分とされたと伝わっています。断食をしてガリガリになったお釈迦様の像をご覧になった方も多いでしょう。他にも逆さに吊されたり、針の上に座ったり。しかしお釈迦様はそういう荒行のおかげで悟りに至ったのではなく、「これじゃ

ダメだ！」と方針転換して悟りに至りました。その方針転換が非常に独創的で、だからこそ後に仏教と言われるようになったわけです。よって坊さんはそんなことしません。

「苦に浸るでもなく、楽に溺れるのでもなく。修行に励め。」

これがお釈迦様の最初の教えでした。これを中道といいます。

中には、滝に打たれたり、千日回峰のような荒行を行ったりする坊さんもいますが、仏教の教えというよりは日本の修験道の影響で、日本仏教独特のものです。

では、荒行をするでもなく、快楽にふけるでもなく、何をしろと教えているのかというと、

悪いことをせず　　諸悪莫作
良いおこないをし　　衆善奉行

こころを清くたもちなさい　　自浄其意

ソクラテスの言葉にも「ただ生きるな、善く生きよ」というのがありますが、同じことを言っているように思います。

なんでもないことですが、日々の自分の行いを省みると、これを続けることが実に大変で難しいことか分かります。何でもないことをちゃんと続ける。これがお釈迦様の最初の教えでした。

後で少しふれますが、法然上人の教えも、専修念仏（他の修行はいらない。ただ念仏を続けよという教え）という教えを説きましたが、これにしてもするのは簡単ですが、続けるのは大変なことです。

毎日の暮らしのなかで自分を律し、よりよい人間に成長しようとする行い、これが仏教の根本です。

四諦

お釈迦さまが中道の次に説いたのが、四諦（したい）という世の中の真理についてです。諦は聖諦の略、聖諦は聖なる真理というような意味です。つまり四諦とは四つの聖なる真理という意味で、苦諦、集諦、滅諦、道諦のことです。

苦諦は「人生は苦だ」という真理です。ある時は幸せでも、いずれはそれも薄れ消えていく。永遠の幸せや物、人はおらず、全ては変化している。愛する人とも必ず別れがあり、一度得た物もいずれは手のひらからこぼれ落ちる砂のように消えていく。人生皆苦。全ては苦に至るという真理です。

集諦は、苦にも原因があるという真理です。強欲、怒り、無知、そして渇愛もまた苦の原因となります。因果応報。物事の全てには原因があり、苦も例外ではありません。

滅諦。苦にも原因があるなら、その原因を解消すれば、苦から必ず解放される。苦から解放された状態を「涅槃」といいます。そこに涅槃があり至れるという真理です。

道諦。そしてこれが一番大事なのですが、道諦は苦を解消し涅槃に至る道、方法があるという真理です。その具体的な方法は八正道と呼ばれています。全ては苦であり、苦には原因がある。つまり全ては関係性の中に存在し変わらぬ実体はありません。ですから結果は原因を変えれば変えられる。

日本人が自分探しに彷徨ってしまうのも、この真理を理解していないからではないかと思います。自分もまた関係性の中の存在であり、変化し続けています。そのようなものを追い求めても仕方ありません。この関係性にこそ意味があるわけです。考えてみれば当たり前のことで、仮に自分探しの結果、素晴らしい歌の才能があったとしても、芸能界という産業が成立している社会でなければなんの役にも立ちません。「世界で一つだけの花」という歌がありますが、世界に一つしかない花は、欲しがる人もいませんので、結局役に立ちません。

一方西洋では、自己（Identity）の確立をうるさくいいます。この自己というのも全くのフリーハンドで確立するのではなく、突き詰めるとどうやら「神」との関係性の中でどう自分を位置づけられるか、という問題のようです。西洋文化

の基底にキリスト教という絶対的な善の存在があり、その神と救済の契約（聖書は正しくは新約聖書といいますが、この新約は、新しい約束という意味です）をした際に負った義務。その枠組みの中でどう自分を位置づけるかという自分探しなのです。

八正道

涅槃に至る八つの道。苦しみから解放された悟りに至る修行法。それが八正道です。

代表的な修行法としては、これ以外にも二九種類が挙げられており、お経には全部で三十七の修行法が書かれています。こちらを三七菩提分法と呼んだり、三七道品と呼んだりします。

正見　世界の真理が四諦であることを理解すること

正思　正しいものの考え方をすること
正語　正しい言葉を使うこと
正行　正しい行いをすること
正命　正しい生業によって生活（命を養う）すること
正精進　精進すること
正念　心の状態を理解すること
正定　心を安定させ集中すること

七つ目と八つ目、心の状態を客観的に理解し、集中して対策を思惟することができれば、一つ目から六つ目も難しくないように思えます。しかしここで説かれているのは、むしろ簡単な物から進み、形を整えていくことで心も体も安定し、正見つまり悟りに至る。そういうロジックを説いているように思います。各正道はさらにそれぞれ細分化されて具体的なトレーニング方法が示されており、取り組みやすいように創られています。

諸行無常

四つ目が諸行無常です。すべては無常。永遠に続くものは何もない、という真理です。無常であるが故に別れは必然であり、同時に苦しみもまた無常であるが故に希望があるわけです。世の中の悲しみ、はかなさ、辛さを根本的に癒すには、この無常という真理に気づく必要があります。このことを示されたのがお釈迦様であり、仏道という生き方ということになります。

「むじょう」という音を聞きますと、「ああ、無情」（レ・ミゼラブル）の情けの無い無情の方を思い浮かべる方が多いように思いますが、こちらはより「はかなさ」に重点が置かれているように思います。日本は季節の変化に富み、また自然災害が多い国ですので、この「はかなさ」という感覚が、他の国の方々よりも身についているように思います。方丈記の冒頭「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」が示す無常観は、戦争や出世競争の「はかなさ」に重点を置いて書かれ、今なお多くの読者を獲得しています。しかし、はかなさだけ

では日々の生活の指針にはなりません。

お釈迦様は『世の中のすべてものは、移ろいゆくものである。それゆえ、自ら努力して生きよ』（遺経経）という言葉を残されています。今風にいえば、会社や国に頼らず、家族からも自立し、法を寄る辺として自ら精進努力する。そういう自分を作り上げていくことが、仏教者としての日々の生き方であると言っているわけです。

法然上人の教え

浄土宗をはじめたのは法然という修行僧です。上人というのは、徳のある高僧に対する尊称で、正確には「法然房源空」というお名前です。房というのは部屋という意味ですので、法然部屋の源空さんという感じなのですが、どちらかというとニックネームの方が定着してしまいました。古来、日本では名前は神聖なものでおいそれと口にしたりしないので（千と千尋の神隠しでもそうでしたよね）、

そのまま定着したのかも知れません。法然上人が生きた時代は平安時代末期から鎌倉時代です。平安の貴族社会から武家社会への移行期で、大乱世といってよい時代です。法然上人の父親・漆間時国や家族もその争いの中で命を落とします。法然上人は父親の死をきっかけに出家したことになっていますが、父親の死は出家の後との異説もあるようです。いまわの際で、父親から仇討ちよりも出家して菩提を弔えと言われたとことが出家のきっかけと言われています。いずれにしても殺すか殺されるか、死と隣り合わせの世界から息子を遠ざけようとした親心があったのは確かなように思います。

専修念仏

法然上人の教えを書き出すと、何冊もの本になってしまいますので、ここでは簡単な紹介に留めたいと思います。詳しくお知りになりたい方はぜひ由木住職の本を読んで頂きたいと思います。

法然上人は比叡山で修行しますが、大変な秀才で末は法主かと周囲から期待されます。しかし法然上人はそれを嫌って比叡山でも更に山奥の黒谷という地に引きこもって修行を続けます。出家したのが九歳。比叡山に移ったのが十三歳。黒谷に引きこもったのが十七歳の時です。それから修行し続けること二十五年、四十三歳の時にある種の悟り（これを回心と呼んでいます）に至り、山を下ります。それから三十七年布教を続け、七十八歳で亡くなります。

法然上人の目的は、この乱世の世でどうすれば人は救われるのか、という問いに対して答えを見つけることでした。それは父親を殺され、母から、そして古里から離れざるを得なかった自分の苦しみでもありました。当時主流は自力の仏教、出家者は修行を積み、徳を積んで解脱、つまり現世での悟りを目指す仏教です。在家者は修行者に布施を行い、貧者を助け、悪を成さぬよう勧められていました。しかし実際の世の中は、源平の争いが絶たず、家々は焼かれ、人々は貧しく泥棒がはびこり、路上に死体が放置されていても誰も気にしない、という有様です。いったいどれだけの人が布施をすることができ、貧者を気にかけることが

できるだろうか。布施をする人がいなければ、出家者も修行を続けることはできません。このような世の中で、果たして自力の救済、悟りはありえるのか。悩んだ法然上人は過去の教えに救いを求めます。比叡山にあったお経を何度も読み返し、奈良にも教えを請いに出かけます。そうして辿り着いたのが他力の救済、すなわち阿弥陀仏による救済だったのです。

阿弥陀仏の救済

阿弥陀仏は、お釈迦様より遙か以前に悟りを開いた仏です。もとは一国の王でしたが、世自在王仏という仏に出会い、修行僧となって法蔵と名乗ります。法蔵はここで誓いを立てます。もし悟りに至り仏になることができれば、これこれを必ずしますという形で、四十八個の誓いを立てます。これがいわゆる阿弥陀仏の四十八誓願です。法蔵は五劫（インドの時間の単位）という長い時間をかけてついに悟りに至り仏となります。成仏を遂げたわけです。ここで一つ知っておきた

いのが、仏と浄土の関係です。修行僧が成仏して仏になると、その力で人々を導く特別な空間を得ます。それが浄土です。阿弥陀仏の場合は極楽浄土、薬師如来の場合は瑠璃光浄土。お釈迦様も仏ですので霊山浄土という浄土を得ています。浄土に対して穢れたこの世のことを穢土といいます。時代劇に出てくる徳川家康の旗に書かれている「厭離穢土欣求浄土」という言葉は、汚れたこの世を離れて浄土に生まれ変わろう、と戦士を鼓舞しているわけです。

いずれにしても、法蔵が修行の末に阿弥陀仏となり、極楽浄土で人々の成仏を助けている。仏になって、なんでも出来るようになっているので、法蔵の時に立てた誓いも実行しているはず。その誓いにすがって救済を得ようという姿勢が、他力ということになります。

なんだか情けない姿勢に見えますが、自分がどれだけ自力でやれるか、お釈迦様の修行リストを眺めますと、とてもそんなことは出来ないと諦めてしまう自分がいます。比叡山一の秀才といわれ、当時の修行僧では最も戒律を守って生きた法然上人でさえそうだったのです。その法然がすがったのが、法蔵の誓い、阿

弥陀仏の力による他力の救済だったのです。

第十八願

阿弥陀様は四十八の誓いを立てましたが、法然上人が注目したのは第十八番目の誓いです。折角ですので漢文の原文を読んでみましょう。

設我得佛　十方衆生　至心信樂　欲生我國　乃至十念　若不生者　不取正覺

現代語訳すると「もし私が仏になることができれば、心から私のことを信じ、私の浄土に生まれ変わろうと願い、私の名前を十回唱える者は、必ず私の浄土に転生するだろう」（最後の部分は逆説的に書かれていて、少々分かりにくいので意訳しています）となります。この浄土に転生することを往生といいます。浄土では直接阿弥陀仏の指導を受けることができますので、必ずほどなく成仏でき

る。他力は成仏を二段階とすることで、凡人・凡夫でも救われる、成仏できる道を開いたのです。しかし誰でもという訳にはいきません。一つ条件がついています。至心信樂、すなわち心から阿弥陀仏を信じ、その証として名前を唱える、つまり念仏を唱えることです。

それまでの仏教でも念仏は大変重要な修行と位置づけられていました。朝題目 夕念仏と言われるように、比叡山でも朝は南無妙法蓮華経と題目（お経のタイトル）と唱え、夕方には念仏を唱えるという修行が行われていました。念仏も数多くある修行の一つだという位置づけです。もちろん法然も実践したことでしょう。しかしこのような修行で自分が救われ得るのか、成仏することができるのか、法然上人は自問自答を続けたようです。

法然上人の苦しみがどのようなものであったか、正確に伝えるものはありません。父親の死、その父が冒した罪。母親との別れ。そして庶民が戦乱に苦しむのを横目に成仏を願う自分。法然上人が辿り着いたのは、智恵一番と言われた法然上人でさえ悪行を冒さずには生きていけない現実と、それを自分の力では乗

り越えられない凡夫としての自覚だったのです。

そのような深い自省と全てのお経を読み返す生活の中で、法然上人は善導という中国の僧侶が書いた「観無量寿経疏」の注釈書を手に取ります。四十八願が説かれた観無量寿経自体は何度も目を通したはずですが、その注釈書には、第十八誓願の新しい解釈が書かれていました。先ほど書いたように、阿弥陀仏の救済の対象になるには条件があります。至心信樂すなわち心から阿弥陀仏を信じるということですが、これは信仰を持つということですので、実際はなかなか難しい。ところが善導は、心に信仰が定まらなくとも、念仏さえすれば必ずその救済の対象になると主張したのです。誤解を恐れずに自分なりの解釈を書きますと、心に定まった信仰が無くても、たとえ騙されたのであったとしても、念仏を口にするということはそこに信仰の種・縁があります。救われたいという思いがあると言ってもよいでしょう。念仏を繰り返すうちにその種は育ち、阿弥陀仏を信じる本当の信仰へと成長していく。善導はこのように阿弥陀仏の救済の道筋を、愚かな凡夫でも実践可能なものへと落とし込んだのです。

法然上人はこの本に出会うことによって、自分が救われる道、そしてそれは自分の罪に苦しむ多くの人々を救う道を発見するのです。法然上人はこの道を専修念仏と呼ばれました。

法然上人はこの発見を人々に伝えるべく比叡山を下ります。既に高名な僧侶となっていた法然の元には救いを求める多くの人々が訪れます。法然の教えは、当時の人々には衝撃的なものであったと思います。そして爆発的に人々の間に広がって行くのです。

当然ながらこのような教えは、これまでの自力をベースとする仏教を否定する訳ですから、他の仏教者の猛烈な反発に会います。法然自身は否定していないと説明するのですが、信者や支援者を失う形になった既存の仏教集団は攻撃をやめません。法然上人とその弟子達は、激しい攻撃や迫害に会いますが、それを乗り越え教えは多くの浄土系宗派に受け継がれ、今日も多くの方々の救いのよすがとなっています。

お寺はよろず相談所

お寺と言いますと、法事や葬儀、お墓などの仏事や、年中行事でしかご縁がないと思われているかも知れませんが、人生相談ふくめよろず相談所のようなものですので、気楽にお立ち寄りください。

開門時間

午前七時～午後五時（寺務所　午前八時より）

ご法事や葬儀のご相談

ご法事・ご葬儀のご相談は、寺務所まで直接ご連絡ください。お申し込みは、希望日の二月前までに、卒塔婆のお申し込みは法事の二週間前までにお願いいたします。ご法事のお申し込み時に必要な内容は

希望日時（土日でお願いしています）
式を主催されるお施主様名
供養の内容（〇〇の〇回忌、先祖代々の供養など）
卒塔婆の志主名（施主とはべつに卒塔婆供養をされる方のお名前）
参列者のおおよその人数
龍蔵寺の会館の利用の希望

です。供花されたい場合も併せてご連絡ください。〇万円分の供花と言って頂ければ、そのように致します。

龍蔵寺会館のご利用申し込み

龍蔵寺では、法事の待ち合わせや会食にご利用できる龍蔵寺会館を壇信徒が運営しております。川島さんが管理者としておりますので、ご予約やお食事の手配など、直接ご相談ください。

龍蔵寺会館　（川島）　電話〇四八〇 - 六一 - 〇八九二

ご葬儀の準備

① お亡くなりになった時

まずはお寺にご連絡ください。ご葬儀に関することであれば何でもご相談ください。もし葬儀社が決まっている場合は、菩提寺が龍蔵寺である旨をお伝えください。

② 枕経・通夜

かつてはなくなる直前に僧侶を枕元に呼び、阿弥陀仏に帰依する最後の機会を与えました。それを枕経といいましたが、現在は多くの方が病院でお亡くなりになり、すっかり呼ばれなくなってしまいました。これから看取りを自宅で行うことが多くなってくれば、また見直されるかも知れません。

一般的には葬儀の前日の夜に通夜法要を行います。もともとは字の通り、臨終に集まった家族や親しい友人が、夜通し故人に付き添って、思い出を語り合う場でした。信仰上も阿弥陀仏によって極楽浄土に往生できたということで、ご長寿の故人であればお祝いの宴会に近い通夜を行うこともあったようです。また、昔は臭いで動物がよってくるのを防ぎ、漂う臭いを線香を焚き続けて消すという意味もありました。

もともとは家族やごく親しい友人が集まる法要でしたが、近頃は翌日の日中に行われる葬儀に参加するのが難しいサラリーマンも多く参列するようになり、

また夜通し見守る必然性も低下したことから、夕方の七時ごろに始まり、九時頃には終わる「半通夜」が殆どになってきました。

さて、通夜の儀式として最も重要なのは、一般の方であれば、遅ればせながら剃髪出家し、受戒して戒名を受けることです。ぎりぎりのところで、阿弥陀仏への信心を確たるものにして、往生間違いなしという体裁を整えて送り出すわけです。

③　葬儀・告別式

通夜にて受戒した故人を、仏弟子として送り出す儀式が葬儀です。棺を閉じて出棺します。いわゆる「引導を渡す」のも葬儀で行います。告別式は葬儀の後に友人・知人が集まって行う別れの集まりです。近年は葬儀と告別式は一体化し、葬儀の中で弔辞も行われるようになっています。

④　火葬・お骨上げ

火葬の直前、炉の前で最後の別れを行います。僧侶も付き添い野辺送りの読経を行います。火葬には一～二時間かかります。火葬が終わるとお骨上げとなります。骨上げには僧侶は付き添いません。地域によっては、遺骨を持ち帰り改めて還骨法要を行う所もあるようですが、龍蔵寺では行っておりません。

これで葬儀一連の儀式は終了となります。

⑤ 戒名

戒名とは何か、はたして現代で必要なのか、というのはなかなか難しい問いです。阿弥陀仏の救済に必要なのは、その教えを信じること、念仏を唱えることだけですので、そこに戒名をもらうかどうか、つまり受戒する（させる）かどうかは関係ありません。しかしなぜ現代も、いろいろと問題を指摘されながらも戒名をつけるという習慣が行われているのかを理解するのは、戒名とは何か？　をしっかりと理解する必要があります。

戒名は正式な僧侶となる儀式である受戒の後に、師から与えられる名前です。出家をして戒律を守り、仏弟子として精進することを誓った証です。世俗を捨て家を離れるのが出家ですから、当然に戒名に名字はありません。代わりにお釈迦様以降の仏弟子の系譜である血脈が与えられます。ですから本来戒名は、生前の出家者もしくは相応の修行をした方にのみ与えられるものです。戒名を自分で付けようと主張する本も出版されていますが、戒名の本来の意味からすれば訳が分かりません。

古来より日本人は名前を大切にしてきました。特に実名である諱（いみな）は、その人の人格そのものであり、その名を口にすることはその人の霊的人格を支配することができると考えていました。映画「千と千尋の神隠し」で千とハクは湯婆婆に名前を奪われ支配されますが、これは日本における伝統的な名前の霊的な力に由来します。現代でも会社で上司を役職名で呼ぶのはその名残です。諱に対して普段使う呼び名を字（あざな）と言います。日本人は成長や立場に応じて、字を変えてきましたが、諱は決して変えません。なぜなら諱はその人そのも

のだからです。そこまで大切な諱を捨てて、まったく新しい人間として新たな名前を頂く。それが戒名でした。仏法に基づく諱ということで法諱（ほうい）とも言います。戒名にはそれだけの決意と意味が込められているのです。

江戸時代になりますと、寺請制度という役所のような機能が寺に与えられます。それまで信仰で結ばれてきた寺と信徒が、寺と檀家という関係で紐付けられ、寺は戸籍を管理したり、旅行手形を発行したりして行政的な機能を果たします。檀家にも寺を経済的に支援することが義務とされました。そのような関係の中で、上流階級しか行わなかった葬儀も庶民の間に広まっていきます。また次第に故人を出家者として送り出したい、現世での行い、つまり悪行をリセットするためにも諱を戒名に改めて送り出したいという思いが人々の中で強まります。そのような背景の中から、本来は出家者のみに与えられる戒名を、臨終時に出家させて受戒させるという体裁をとり、在家の壇信徒にも戒名が与えられるようになりました。そこには、生前にあった苦労や悲しみ、犯さざるを得なかった悪行、そういったものから故人を開放し、きれいな体で送り出したいという残された

ご家族の強い思いがあったのだと思います。この思いは現在でも変わらないように思います。

この思いの強さの表現として、戒名の長さが利用されてきました。そこでは故人を思う強さを具体的に示したいと願う壇信徒の願いと、経済的に自立したいと願う寺の思いが一致したのだと思います。

本来戒名は二文字です。そこには仏の世界には名前による差別は存在しないという象徴的意味合いが込められています。しかし実際には、故人の行いや性格を示す文字がその二文字の前後に付けられます。このことを仏教の堕落と呼ぶのは簡単ですが、それによりご家族がより安心し、気が楽になり、また寺も続いてこられたという背景と歴史をご理解頂ければと思います。その上で通夜・葬儀を行う限りにおいては、それがまさに受戒の儀式であることをご理解頂き、満足のいく戒名を望まれてはどうかと思います。

ご葬儀以降の法要・回忌法要

ご葬儀が終わり、落ち着く暇も無く初七日や四十九日、一年後には一周忌、三回忌と法事が続きます。大抵の方にとって、ご葬儀を取り仕切るのは初めてのことですし、こういった法要にいったい何の意味があるのか、と疑問に思われるのも当然です。詳しい方であれば、阿弥陀様の救済を信じるものは、臨終に際して阿弥陀様の引率で極楽浄土に生まれ変わる。それなのに親戚が集まって追善供養するようなことに意味があるのか、と思われるでしょう。追善供養とは残された遺族が往生した故人の為に、徳を積んで振り向けるという行為ですが、極楽にいる故人に対して苦界にいる私たちができる支援などたかが知れているはずです。法然上人の弟子、親鸞は「亡き父母の追善供養のために、念仏一遍たりとも唱えたことはない」と強調しています。これも他人に振り向けるような善行ができるような自分ではないという愚者の自覚、そして阿弥陀仏の誓いにすがってまずは往生し、悟りを開いて再び救いにもどろうという決意の表れと言われています。

しかし残された家族にとって、葬儀が終わってはい終了というのでは、あまり

にも心の整理の時間がありません。浄土宗でも、死後直ちに阿弥陀様によって往生できるので、四十九日目に生まれ変わり先が決まるという考えは間違いとまでは言いませんが、浄土宗の壇信徒には無関係という立場を取っています。では四十九日の法要は行わないかといえばそうでもなく、故人追慕の機会としてやはり行っています。四十九日法要は元をたどればインドの古い習慣です。また、神道でも五十日祭として同様の儀式を執り行います。このように違う場所で、時間を超えて行われてきた行事には、何か合理性があると考えるべきです。

・　自らの信仰を深め
・　故人との関係を再構築して
・　家族、親族の絆を確認する

というような合理性と信仰が結びついたからこそ、今なお続いているのではないでしょうか。

さて、回忌法要は死にまつわる「穢れ」思想、儒教の服喪、それから日本の室町時代に始まる十三仏信仰が混じり合って今日の形となっています。十三仏信

仰では、葬儀後に仏弟子となった故人が、十三の仏を巡って仏徳を授かり、その福徳を遺族・子孫に授けながら成仏していくというものです。遺族もまた、故人のために追善供養の法要（年回法要）を営んだり墓参をしたりして支援します。

このように古くから日本では、死は故人との関係に終止符を打つようなものではなく、関係が変化するだけで終わりとはなりません。それだけ我々は死者を身近に感じてきました。連絡が取りにくい海外に旅立ってしまったようなものです。年回法要ではこのような関係の変化を認識し、心を整理しながら再構築する。そして互いの健康や自己の成長、死後の安楽を願ってきました。壇信徒の皆様にも、このように祖先が大事にしてきた時間と空間を大切にして頂ければと思います。

このような伝統では、三と七のつく機会を大切にします。これは仏教の教えが善悪に偏った二元論ではなく、中道という第三の道を示したこと。月の満ち欠けから七日周期で物事が変化すると考えたからです。その由来と現代的な意味を次に整理してみました。

① 初七日（不動明王）

十三王思想では不動明王に当たります。葬儀が終わり、親戚や親しい関係者を集めての法事となります。葬儀への協力の慰労・謝意を伝える機会でもあります。相続についての話し合いも、時間的にこの時からはじめるのが良いようです。忌中明けは本来四十九日法要の後ですが、日常生活に支障がある場合は、初七日をもって忌中明けとすることもあります。近年はさらに短縮して葬儀と同時に行うこともありますが、できれば本来の主旨に沿って行いたいものです。

② 二・七日から六・七日まで

十四日目　釈迦如来
二十一日目　文殊菩薩
二十八日目　普賢菩薩
三十五日目　地蔵菩薩（閻魔大王の審判はこの時）

③ 四十九日法要（薬師如来）

四十九日は満中陰ともいい、故人の輪廻先が決まると古代インドでは言われていました。日本の伝統的な感覚では、近親者がなくなると、遺族も気枯れ・穢れ（ケガレ）の状態になります。日本人はケガレを伝染するものと考えました。ですからインフルエンザと同じで、ケガレの期間は外部との接触をなるべく避け、静かに過ごすようにします。この期間を忌中といい、四十九日間続きます。年始の挨拶も、忌中の間は行いませんし、来客も断ります。これはケガレの伝染を避けるためです。年賀状のやりとりは年始の挨拶と代わりですので、同じ扱いとなります。最近は喪中（一年間～二年間）の人に年賀状を出すのを失礼と見なすようになりましたが、本来喪中はその人の個人的な感情ですので、年賀状を寄こすなと他人に押しつけるようなものではありません。もちろん、当人は勝手で

すが。仏壇や位牌も四十九日までには用意するようにします。

十三仏信仰が説かれた十三王経というお経には、後四十九日間にわたり、無くなった方が順番に審判を受ける様子が描かれています。最初の七日目には殺生が審議され、次の十四日には盗みが審議されます。二一日目には、邪淫の行い、二十八日目は妄語、つまり嘘をつかなかったどうかが審議されます。我々がよく知る閻魔大王の審判は実は三十五日に登場します。ここで一応の審判が下される訳ですが、四十二日目には不満がある場合の再審があります。そしていよいよ四十九日目に次の世界への旅立ちとなるわけです。この経には、七日毎に故人の行いを思い出し、供養するように説かれています。そして故人のことを思い起こさせる一方で、実は残された家族が、今後どのように生きるべきかを説いており、そのことを考えさせる為の行事でもあるのです。これは親しい人を失った悲しみから、徐々に立ち直り日常生活に戻っていく癒しのプロセスに他なりません。

ですので四十九日では相続をはじめとする懸案事項をおおよそ決定し、皆で協力分担して実施に移す。そういう機会でもあるわけです。

④　百か日（観音菩薩）

百か日法要は卒哭忌ともいいます。儒教の「士は三カ月にして痛哭し卒わる」からきています。四十九日で決めた遺産整理などを一通り済ませ、挨拶回りなども終えて一区切りという意味合いの法事です。借金があったりして財産放棄をする場合は、死後三ヶ月以内に手続をする必要がありますので、そのような場合も終わっているはずです。普通の生活に戻るけじめとしましょう。

⑤　一周忌以降

最初に書きましたように、仏教では三や七という数字を大事にします。ですので年回法要もそれに関連した数字の年に行います。三回忌以降は、葬儀を一回目とカウントしますので、実際に経過した年と一つずれるのでご注意ください。

一周忌（一年後　勢至菩薩）

三回忌（二年後　阿弥陀如来）　二年が経過した年に三回忌を執り行います。

もともと儒教では服喪期間は二十五ヶ月でしたので、三回忌をもって喪が明けていました。二年は長すぎるということで江戸時代には一年に短縮され、現代でも一周忌で喪明けとすることが多いようです。

七回忌（六年後　阿閦如来）

十三回忌（十二年後　大日如来）

三十三回忌（三十二年後　虚空蔵菩薩）

一般的には、三十三回忌をもって弔い上げとして個別の法要は行わず、以降は先祖代々として合祀してけじめとします。

浄土宗ではその他、十七回忌、二十三回忌、二十五回忌、二十七回忌、三十七回忌、四十三回忌、四十七回忌、五十回忌、百回忌も習慣として行われています。複数の年回法要を重ねて行うために考え出されたようで、必ずしも法要をしなければならないという訳ではありません。

数珠

数珠は、お念仏や真言（呪文）の数を数える仏具です。こすり合わせて音を点て、楽器として使うこともあります。

そのような実用的な面以上に、それを身につけることは仏教徒としての崇敬の念の表現でもあります。

龍蔵寺ではもっぱら写真のような数珠を使います。二連の数珠で、唱えた念仏の数を数えるカウンターの役割もします。この数珠は浄土宗独自のもので、法然上人の弟子、阿波介が開発したものです。阿波介は元陰陽師でなかなかのアイデアマンだったようです。ある日阿波介は「金があっても、人生の救済には何の役にも立たない」と空しさにおそわれます。そこで知人で法然上人の弟子の熊谷直実（熊谷出身）に法然上人を紹介してもらい、感得して弟子になったというわけです。この阿波介が、毎日使う念珠の糸がすぐ切れてしまうので、もっと簡単に数を数え

られないかと考案したのがこの数珠です。

二連の数珠は一つが二十七玉、もう一つが四十玉あります。さらに房にも平玉十、丸玉が六つついています。

念仏を唱えながら玉を一つ繰り、一蹴すると別の輪の玉を一つ繰って、ということを繰り返すと、二十七（息抜き二回分を除くと二十五）×四十×十×六＝六万四千八百（約六万回）の念仏を数えることができます。

阿波介は晩年、平泉金色堂で毎日念仏を唱えていたといわれています。滅亡した奥州藤原氏の菩提を弔っていたのかも知れません。そしてこの地で念仏を唱えながら往生したと伝えられています

この数珠は合掌しているときは親指にかけて手前に垂らすようにします。

ご焼香

お香を焚くという習慣は世界中で見られます。水や燃料が貴重で、現在のように毎日入浴することが叶わなかった時代、人々の体臭は現在では想像もできないくらい臭かったようです。特に大勢の人が集まる宗教施設での体臭問題は深刻でした。まずはちゃんと体を清めてお寺に来なさいと指導し、次にお香を焚いて場を清めたわけです。

スペインのお遍路、サンティアゴ・デ・コンポステーラの目的地、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂では巨大な振り子状の香炉で聖堂内にお香を充満させます。巡礼が終わったばかりの参拝者は、不潔な者がほとんどだったようで、昔は相当臭かったようです。当時は病の予防効果もあると信じられていました。その時の習慣が現在も引き継がれ、名物となっているわけです。

出発点はこのように衛生面の配慮であったと思われるお焼香も、お香の香りを嗅ぐと心が落ち着き、集中力が増すという効果が認識され、さらに時を経て、

汚れた心を浄め、仏様や亡き人に自分の真心を捧げるという、信心と精進のシンボルに変わってきました。

何回お焼香をすればいいのですか？

とよく聞かれますが、お葬式やご法事の時には一回で良いと思います。故人やご先祖への真心を、一つまみのお香に込めて手を合わせて頂ければと思います。

よく三回の焼香がマナーといわれますが、一つまみは自分の精進の為に、一つまみはご先祖様の供養に、もう一つは一切衆生の為に、というようにそれぞれに意味を持たせています。中国では長いお線香を三本もって礼拝しているのを見かけますが同じことです。日常的なお参りやご自宅で、時間的余裕がある場合は、このようにされるのが良いと思います。

お仏壇のご用意

お仏壇はご家庭における仏の礼拝空間です。もともとは貴族や武士、富裕な商人などが、持仏堂として自分専用の礼拝施設を自宅の敷地内に設けたものが、庶民に広がるにつれ、小型化され仏間、仏壇として定着しました。その過程で、先祖の魂を迎えたり、祀ったりする空間が一緒になり、仏様とご先祖様を祀る現在の仏壇となりました。

壇信徒の仏壇の必須アイテム、余裕があれば整えたいものは次のようになります。

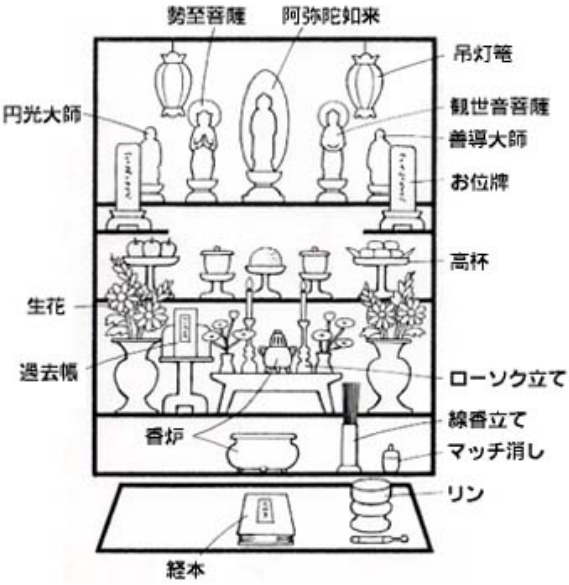
① 必須アイテム

浄土宗のご本尊である阿弥陀様の仏像、仏画。もしくは「南無阿弥陀仏」と書かれた掛け軸など。

蝋燭を灯す燭台、線香を立てるための香炉。

最小限これだけあれば、蝋燭を灯して線香を焚き、少し心を整えて念仏を唱える用意となるのではないでしょうか。蝋燭は悪を厄払い、お線香の香り・煙は邪心を清めます。位牌は空いた所に丁寧に安置します。。

阿弥陀様が安置される空間は、西方極楽浄土のメタファーでもあります。なるべく明るく荘厳に整えたいものです。仏壇のスタイルとしては、漆塗りに金箔を合わせた金仏壇や、シンプルな唐木仏壇、また現代的なデザインのものまで様々ありますが、好みやスペースに合



浄土宗 HP より

わせてご用意されれば良いと思います。

時間があれば花瓶に生花を生け、お仏飯や茶湯をお供えしましょう。固くなったご飯は、庭にまいて（もちろん可能であればですが）鳥や虫への施しとします。朝には仏様に供養し、夕方には植えた動物に施す（餓鬼に施しを行う施餓鬼の代わり）ことで善行を行う修行となっているわけです。

② 脇侍

阿弥陀仏の従者ともいえる脇侍は観音菩薩と勢至菩薩です。空間に余裕があれば、向かって右側に観音菩薩、左側に勢至菩薩を安置します。観音菩薩は現世の人を救う慈悲の心、勢至菩薩は智慧のシンボルです。この二仏と阿弥陀仏で阿弥陀三尊といいます。浄土宗ではこのセットが定番ですが、龍蔵寺では勢至菩薩がおられず、代わりに地蔵菩薩が本堂には安置されています。地蔵菩薩は仏に成れるのに、現世に留まり人々を救うと誓ったため、他の菩薩と異なりお坊さんの

格好をしています。不信心で地獄に落ちたもの、親より先に亡くなった子供を賽の河原から救う菩薩として大変人気があります。

さて、絵のなかでその両脇に安置されているのが法然上人（右側・円光大師と表記）と善導大師（左側）です。このお二人は仏様ではありませんが、浄土宗祖として、またその回心に大きな影響を与えたお方として大切にお祀りしています。

仏壇の新調・引っ越し

仏壇を新調するに伴い、ご本尊の仏様も新調される場合、開眼供養という法要を営みます。仏の形をした彫刻から、信仰の対象である仏様にする。そういう仏事です。阿弥陀様は西方極楽浄土におられるわけですが、いつでもお越し頂けるように、道を繋げる。あるいは電話回線を開通する、そんなイメージでしょうか。開眼法要はお仏壇が整った段階で、お仏壇のある場所で行うのが通常ですが、仏

像をお寺にお持ち頂ければ本堂で開眼の儀式を執り行うことも可能です。時間は十五分ほどです

古いお仏壇を新しくされる場合は、お仏壇を処分される前に、いったん発遣（閉眼）法要を行います。魂抜きともいいます。いったん仏様から仏像に戻すことで、移動したり保管したりすることが失礼にならないようにします。お仏壇ができましたら、改めて開眼法要となります。

お仏壇を新調される場合は、仏壇店などで、浄土宗信徒・檀家であることを伝えご用意ください。お仏壇の安置後、

龍蔵寺　本堂の阿弥陀三尊
右側：観音菩薩　　左側：地蔵菩薩

開眼法要をお寺にお申し込みください。

お仏壇を引っ越しされる場合は、引っ越しの前に発遣（閉眼）法要、新居に移った後に、開眼法要を行います。同日でも別日でも構いません。

お仏壇を新調したり、整理されたりする場合、併せて古い位牌を整理される場合があります。その場合も同様に開眼の法要を行います。お位牌の数が多く、整理されたい場合は、「〇〇家先祖代々」というご位牌にまとめて合祀されるとよいでしょう。無ければ新調して合祀します。記録が途絶えないよう、過去帳にお名前があるかを確認し、なければ改めて書き入れます。

お仏壇の新調はお祝い事です。お布施は紅白の封筒でお納めください。金額はお仏壇の購入価格の一割程度が目安です。

お墓について

龍蔵寺にお墓をお持ちの方には、檀家としての長い歴史の中で境内に有するようになった方と、新たにお求めになられた方がおられます。現在では、いずれも龍蔵寺墓地規約というお約束の元に、墓地を使用頂いています。それぞれの墓地には、墓地管理使用責任者がおられます。通常は一家の主ということになりますが、ご多分にもれず多様化しています。

① 墓の管理・維持費

龍蔵寺では、掃除料として年間四〇〇〇円をお預かりしています。加須市内（と羽生市の一部）の方で、地域の世話人の方が掃除料を集金されているところは世話人を通じ、それ以外の方は年末に郵貯銀行振り込み用紙をお送りしていますので、振り込みでお支払い頂いています。よく分からない場合はお寺にお尋ねください。

市外の方は、夏のお施餓鬼のお申し込みのおりお支払い頂いています。夏に支払いができなかった場合は、年末に郵貯銀行振り込み用紙をお送りしていますので、こちらでお支払いください。

② お墓の建立・改装

まずはその旨をお寺のご一報ください。突然石材店さんの職人さんが来られるとびっくりします。特に指定の石材店はありませんので、気に入った石屋さんにお願い下さい。近隣の石材店のご紹介もできます。工事が終わりましたら開眼法要を墓前で行いますので日程をご相談下さい。

③ 納骨

葬儀が終わり、四九日の法要が済みますと、納骨となります。納骨の際には必ず埋葬許可書証を持参下さい。墓石や墓碑に亡くなられた方の戒名等を字彫り

される場合は、一週間以上前に石材店に直接ご依頼下さい。事前にご一報願うのは墓石建立と同様です。納骨の作業についても併せて石材店にご依頼下さい。骨壺を納めるカロート（納骨室）の開け閉めを請け負ってくれます。墓地・墓石のタイプによってはご自分で開け閉めができそうなカロートもありますが、失敗して石が割れたりするリスクを考えるとお勧めはできません。

④ 改葬・墓じまい

住まいが遠方であったり、他宗・他教に改宗されたりして、墓の移動を希望される場合は改葬という手続になります。近年は墓を守る跡継ぎがいないなどの理由で、墓そのものを廃止してしまう、いわゆる墓じまいを希望される方も出てきました。

改葬の場合は、墓地を更地にしてお寺に返還して頂きます。

また、改葬には寺が発行する「埋葬（蔵）許可書」が必要となりますので、ま

ずはご相談下さい。むりにお引き留めするようなことは致しませんのでご安心ください。カロートから骨壺を取り出して更地にする前に、通常は発遣（魂抜き）供養を行います。石とはいえ、墓として長年ご家族が祈りを捧げてきたものですので、最後にあたっても敬意を払いたいものです。

改葬の予定がない場合も、墓じまいをされる場合は、遺骨、骨壺はお持ち帰り頂くことになります。ご自宅で保管するか専門業者にご相談下さい。トイレに流したり、ゴミとして出したりすることは違法ですし、違法である以上に、悪徳行為としていずれご自身に返ってくるように思います。龍蔵寺には、草花を植えた合祀墓がありますので、遺骨の合祀をお希望の場合はご相談下さい。

お盆とお施餓鬼

お寺の夏の行事といえばお盆とお施餓鬼です。同時期に行われることが多いこの二つの行事は、もとは別々のお経に書かれた話に由来するまったく別の行

事です。お盆の行事は『盂蘭盆経』というお経に、施餓鬼という行事は『救抜焔口餓鬼陀羅尼経』というお経に基づいたものです。

お盆の行事はご先祖様の供養と思っている方が多いかと思いますが、正確には亡くなった父母の子供（自分）への愛情と、子供に父母への恩を知らせる行事です。『盂蘭盆経』にはお釈迦様の弟子、目蓮の母親が、死後餓鬼の世界に堕ち苦しんでいる様子が描かれます。その苦しみはさかさに吊されている苦しみ、インドの言葉ではこれをウラボンといい、そこからお盆という言葉が出てきています。では、なぜ、目蓮の母親、つまり我々の母親が餓鬼の世界に堕ちたかといえば、「わが子、わが子」という愛情が、すべてに等しく愛情をそそぐ仏の目からすれば、慳貪（物惜しみ）の罪にあたったからで、その結果、ものの得られない餓鬼の世界に堕ち、苦しむことになったわけです。しかし、親の「わが子、わが子」の愛情があったからこそ、私たち子供は健康で、立派に育ったわけです。お盆のお経は、母の苦しむ姿により、親の子供の愛情、あるいは親の恩を感動的に伝えようとしたのです。

一方、施餓鬼のお経『救抜焔口餓鬼陀羅尼経』にはこんなことが説かれています。お釈迦様の弟子の阿難のところに焔口という餓鬼が現れ、「あなたは三日後に命がつき、餓鬼の世界に堕ちる」と予言します。驚いた阿難はどうしたら良いかとお釈迦様に尋ねます。お釈迦様は餓鬼への施しと仏への供養をすれば、命はのび、救われると教え、そこから始まったのがお施餓鬼の行事です。

お盆もお施餓鬼も両者とも、餓鬼を救うことで母親や自分を救うということが共通しています。このところから次第に餓鬼に施し、仏を供養すれば、父母や先祖の救いと自分の命の延命が実現できるという考えが生まれ、ワンセットの夏の行事が生まれたのです。

お布施

実は「お布施はいかほどにすれば・・・」という質問は、お寺で最も多い質問の一つです。いろいろな調査を見ましても、お寺への不満点として、料金体系が

不明瞭というのが、大概トップにきます。昨今は、流通大手の葬儀サービスやインターネットの僧侶派遣が広がってきました。いずれも明瞭会計をうたって、お寺への不満を吸収しています。

この動きに対して、お寺側からでる反発反論は、葬儀や法事は宗教行為であって、商行為ではない、お布施はサービスに対する対価ではない、というものです。私もこの立場に賛同しますが、問題は壇信徒の皆様にそのことがちゃんと伝わっているか、ご理解頂く努力をしているかどうか、ではないかと思っています。お布施は布施行という修行の一環である、とお寺がいくらいいましても、そのような思いでお布施をされる方は、実際どれほどおられるでしょうか。布施行は、慈悲の心をもって他人に財産や金銭、行いなどを施すことで、仏道修行の基本の一つです（六波羅蜜の一つ）。布施によって徳を積み、今世来世で苦を離れ成仏に近づくための修行です。家族を捨て財産を捨て、仏道修行に打ち込む僧侶や貧しい人々を支援することで、世の中が回りまわってより良くなることを期待する。それが布施行です。問題はこの布施行の受け取り先・預け先として、お寺が

相応しい内実を伴っているのかが問われているのだと思います。世間からはかなり怪しいと思われていて、そのことが不信につながっているように思います。

また浄土宗に限っていえば、法然上人は、布施行など到底できない戦国末法の世で、どうすれば救われるのかを追求し、ついに専修念仏の教えにたどり着かれたわけで、お布施をしなさいというお誘い・お説教は筋が通りません。しかし一方で、布施を預かって、本堂や伽藍、境内を維持し、僧侶としてはそこからおこぼれを頂いて生計を立てる必要があるわけで、まったくお布施は必要ありません、といえないのもご理解頂けるのではないかと思います。実際、法然上人ご自身も、お布施を断るようなことはされませんでした。むしろ、清貧を貫かれた法然上人のところには、多くのお布施が集まりましたし、それによって京都の知恩院などの礎が築かれたのも事実です。法然上人は、それらのお布施を、専修念仏を広めることに使われた訳ですが、果たしてその弟子である我々は、預かったお布施を正しく使っているのか、相応しい行いを日々しているのか、そういったことが問われているのではないかと思います。

長々と苦しい言い訳のような事を書いてしまいましたが、お布施とは本来そういうものなのです。ですから、お金がないので、今できるお布施は、精一杯頑張ってもこれしかできません、となれば、「それで十分です。大変結構なことです」となりますし、これで足りますか？　と聞かれれば、「基準はありません。されたいだけお布施ください」となります。それでお経に違いがありますか？と聞かれれば、「違いはありません」と答えます。

「で、それでおいくらなんですか？」という最初の質問をまだされたい方のために、「伝統的には」ということで、目安をお示しさせて頂きます。回忌法要などのお布施は年世帯収入の一％、日常的なお布施はその十分の一。ご葬儀はその一〇％。お墓やご仏壇の開眼供養のお布施は購入金額の一〇％。卒塔婆によるご供養は、お施主様は一万円、その他の方は五千円です。そのような日々の皆様のお布施で、大凡お寺を維持して行くための費用が賄えます。

皆様の喜捨、お布施を預かる身として、まさに壇信徒の皆様が喜んでお布施したくなるようなお寺・僧侶になるべく気を引き締めて精進したいと思います。

第三章　檀信徒の十二ヶ月

多くの檀信徒にとって、お寺との付きあいはご葬儀や法事、お墓参りやお施餓鬼といった仏事に限られているのではないでしょうか。最初にも書きでましたが、お寺は阿弥陀仏による救済を願う念仏道場です。活動の中心は念仏の場を提供するということですが、長い歴史の中で培われた伝統行事も数多くあります。ここではお寺で行われる一年間の行事を、順にご紹介したいと思います。

定期・不定期に行われる行事

①　お念仏の会

冬季を除く四月から十一月の一日と十五日（十一月は一日のみ）の午前六時半

よりお念仏の会を開催しています。
お念仏の会では、住職指導の下、日常勤行とお念仏を行います。参加費無料。壇信徒であれば誰でもご参加できます。

② お話の会

龍蔵寺にご縁のある方からお話を頂きます。歴史の話あり、終活の話あり、この人の話を聞きたいというリクエストありましたら、お寺までご連絡ください。参加費無料。壇信徒であれば誰でもご参加できます。

③ 音楽の会

壇信徒のバンドによる音楽会。参加費無料。壇信徒であれば誰でも参加できます。

一月

修正会（一月一日）

お正月は神社に初詣の方が多いかと思いますが、お寺に初詣も良いものです。本尊前で手を合わせ、南無阿弥陀仏と唱えて新年を健康に迎えられたことに感謝したいものです。墓にも立ち寄り手を合わせてご先祖様にも感謝しましょう。お墓の周りは十二月中に掃除しておきます。

御忌会（一月二十五日）

法然上人の命日です。法然上人は建暦二年（一二一二年）に八〇歳でお亡くなりになりました。上人のご遺徳を偲び、ご遺訓の『一枚起請文』を拝読します。一枚起請文は、亡くなる二日前に弟子の源智の願いに応じて、浄土宗の教えを一枚にまとめたものです。原本は京都の大本山金戒光明寺に保管されています。

二月

涅槃会（二月十五日）

お釈迦様がお亡くなりなった日です。諸説ありますが、お釈迦様は紀元前四六三か紀元前前三八六ごろにお亡くなりになったようです。お釈迦様入滅の様子を描いた涅槃図をかけてお念仏を唱えます。

三月

彼岸会（三月の春分を挟んだ前後三日間）

春と秋にあるお彼岸は、昼と夜の長さが同じになり、真西に日が沈むことから、西の方角にある極楽浄土への往生を願い、日々の行いを省みるよい縁日とされました。彼岸は三途の川の向こう側、つまり悟りの世界を指します。日本では伝統的にこの期間に、布施（お寺の布施でも構いませんし、貧しい人への寄付、ボランティアなどでも構いません）、持戒（戒律をちゃんと守る）、精進など、仏教

の教えを実践すれば、それが悟りを拓く種となると考えました。また日没を前に念仏を唱え、極楽浄土への往生を願う日想観という瞑想修行を行うにも良い日とされました。

お寺にお参り頂き、年末来のお墓の汚れを落とし、手を合わせて気持ちを新たにしたいものです。夕日のきれいなところに出かけて、ゆっくりと瞑想するのも良いでしょう。

小生は大阪の一心寺という寺で育ちましたが、この寺は法然上人が日想観をされたことを開山の縁起としています。後醍醐天皇も共に日想観をされたことがあります。もし大阪に行かれることがあれば、是非お立ち寄りください。大阪夏の陣の旧跡でもありますので、家康、真田幸村関連の名所も周辺に多くあります。

四月

宗祖降誕会（四月七日）

法然上人の誕生日。法然上人は長承二年（一一三三年）四月七日に生まれました。翌日の灌仏会とともにお祝いします。

灌仏会（はなまつり）（四月八日）

お釈迦様は、現在ネパールにあるルンビニーで生まれました。紀元前四六三年か前五六五年に生まれたとされています。昔のことであまりはっきりとしませんが、実はイエス・キリストの誕生日とされるクリスマスもよく分かっていません。キリストの誕生と昼の長さが夜より長くなる冬至のイメージを重ねて一二月二五日としたようです。余談です。

お寺ではお釈迦様が生まれた時の姿を模した、誕生仏をお祀りします。お寺にお参りに也、小さなお釈迦様に甘茶をかけてお祝い頂ければと思います。甘茶をかけるのは、お釈迦様が生まれたときに、九匹の龍が現れ甘露の雨を降らせたという伝説に由来します。

五月・六月

五月・六月にはこれといった仏事がありませんが、五日の端午の節句やゴールデンウィーク中には墓参をして日々の報告などをしたいものです。

七月

お盆の入り（七月一日）

お盆はお寺に取りましても、壇信徒の皆様にとっても、一年で最も重要なイベントです。お盆の詳細については、次章で説明するとして、ここでは簡単になぜお盆の入りが二回あるのかを説明することにします。お盆は、餓鬼道に落ちた母親を救う物語を通じ、父母への恩を確認し感謝を新たにする行事です。お経にはお盆の法要を七月に行いなさいと具体的に書いてあります。明治になるまではもちろん旧暦で行ってきましたので、現在の太陽暦でいえば、おおよそ八月ということになります。農村部では、暦が変わったからといって、一朝一夕にはお盆の時期を変えられません。七月は農作業の繁忙期二当たります。一方都市部では、太陽暦に暦が変わると、徐々にお盆の時期も暦の七月に行われるようになりました。このようにして、お盆の行事は都市部では七月に、農村部では八月に行われるようになったわけです。龍蔵寺の壇信徒にも東京などに居を構えお盆を七月にされる方もおられます。そこでお寺ではお盆（同時に行う施餓鬼）の木札を七月ご用意し、七月のお盆に供えるため七月一日にお盆の入りの法要を行って

います。

七月のお盆の入りでは、檀家世話人を中心にお集まり頂き、盆施餓鬼を木札で供養する法要を行います。お時間ありましたら是非ご参列ください。通常十一時から法要を開始いたします。

八月

お盆の入り（八月一日）

八月のお盆では、特に新盆を迎える壇信徒のご家庭に伺い、壇信徒が用意した盆棚の前で新盆供養を行います。しかし日本人のライフスタイルも大きく変わり、新盆の方でもお盆の期間中（十三日～十五日）に家を空けざるを得ない方々が増えてきました。このような方々の新盆の法要を八月一日に行っています。新盆の方で、お盆期間中に不在とされる方は、ご位牌をご持参のうえ、午前九時からの法要にお集まりください。

棚旗（八月七日）

旧暦の七夕です。元は棚旗ともいったように、この日に仏壇仏具・盆棚をきれいに掃除して準備を整えます。

お盆前日（八月十二日）

お盆の前日で、盆棚を整え、送り火・迎え火用のオガラなども準備します。新盆の場合は、白提灯も用意します。

お盆（八月十三日～十五日）

提灯や蚊取り線香を持参し、お寺からお盆の迎え火の種火を移して持ち帰ります。火は家の仏壇まで持ち帰って蝋燭

やアルコールランプに移し、お盆の期間は火をたやさず灯します。迎え火は、極楽から迷わず家に辿り着くようにと目印に玄関先で焚きます。マンションの場合は、周りに注意してドアの前やベランダでお迎えしても良いでしょう（マンションのルールに従ってください）。

龍蔵寺では八月二十二日に施餓鬼法要を行いますが、お盆期間中十三日～十五日にかけてお施餓鬼の受付をしています。龍蔵寺では、お盆とお施餓鬼のご供養の証として盆施餓鬼木札をお渡ししています。

送り火（八月十六日）

お帰りになるご先祖様を送る送り日を夕方に灯します。この時に仏壇の火も消すようにしましょう。

大施餓鬼会（八月二十二日）

その年に施餓鬼の施主となられた壇信徒の名前を読み上げて、餓鬼を供養する施餓鬼法要を行います。午前十一時より開始し一時間ほどで終了します。前年の盆施餓鬼木札は、この時に持参頂き、納めの木箱にお返しください。

九月

彼岸会（九月の春分を挟んだ前後三日間）

春のお彼岸同様、極楽浄土への往生を願い、日々の行いを省みるよい縁日とし

ましょう。

十月・十一月

十月・十一月にもこれといった仏事はありませんが、心を落ち着かせお念仏をするには大変良い季節です。精進ください。

十二月

成道会（十二月八日）

三十五歳のお釈迦様がこの日悟りを開かれました。まさにこの日に仏教が生まれたといえます。お寺でもこのお祝いの法要を行います。

また日本の伝統として、八日が「事納め」の日でもあります。現在でも、あまり年末に近いと、公のことは遠慮するような雰囲気がありますが、もともとは八日がこと納めで、この日以降は正月の準備が忙しくなるので、あまり仕事はしな

いようにしていました。

除夜会（十二月三十一日）

龍蔵寺では毎年十二月三十一日に除夜の鐘を壇信徒の皆様と撞いています。除夜の鐘は一分にひと撞、午前零時に百撞目、明けた一月一日の零時八分に最後の一〇八撞目となるように開始します。

通常二十二時の壇信徒のお集まり頂き、鐘堂にてお経をあげて二十二時二十一分から開始します。毎年多くの壇信徒の方々が、三々五々鐘を撞きに参られます。来られた順にお焼香頂き、鐘を撞いて頂いて居ます。一〇八という限りがございますので、是非とも撞きたい方は、早めにお越し下さい。

さてそもそも除夜の鐘は中国から伝わった風習です。四苦八苦を4×9＋8×9と解いて一〇八とした、という説もありますし、煩悩の数という説もあります。インドでは感覚を眼・耳・鼻・舌・身・意の六種（六根）と考えていましたが、それぞれに好・悪・平の3つのレベルがあり、更にそれを浄・染（悪に染ま

った）の二種に分けて三六の煩悩があると考えていました。それを前世・今世・来世の三世分をかけて一〇八の煩悩としました。鐘の音を聞きながら、我が身の苦しみの原因である煩悩が消えること、すなわち六根清浄を願って鐘を撞き、新年を迎える。それが除夜の鐘です。

勤行（ごんぎょう）とは本来、毎日の仏道修行に励むことを指します。その勤行の一つに読経があるわけですが、日常的に行う読経を日常勤行と呼んでいます。読経とあるように、お経は憶えることを求めていません。人には間違って憶えてしまったり、途中で記憶が変わってしまったりすることも多々ありますので、仏様の言葉を正確に理解するという意味で、「読む」ということに力点が置かれているわけです。

ここに挙げたお経は、色々な長いお経からエッセンスを抜き出して構成されたものです。大凡の意味をボックスに書きましたが、詳しい内容は住職の「くわかるお経の本（講談社）」をご一読いただけると、より身近に感じられるかと思います。ちなみに● 印はリンを鳴らすところです。

香偈

願我身浄如香炉・願我心如智慧火
念念焚焼戒定香・供養十方三世仏

勤行の始まりの決まりの偈文
お香を焚いて仏を供養し、心と体も清らかでありたいと願いますというような意味。

三宝礼

一心敬礼・十方法界常住仏
一心敬礼・十方法界常住法
一心敬礼・十方法界常住僧

仏法僧に帰依することを宣言。

三奉請

奉請弥陀世尊入道場
奉請釈迦如来入道場
奉請十方如来入道場

阿弥陀様や釈迦牟尼仏などの仏様をこの場に招来。

懺悔偈

我昔所造諸悪業　皆由無始貪瞋痴
従身語意之所生　一切我今皆懺悔

これまで犯してきた悪行の数々について、勤行の前に懺悔します。

十念

区切りの十念
勤行は三部構成。第一部の終わり。

開経偈

無上甚深微妙法　百千万劫難遭遇
我今見聞得受持　願解如来真実義

お経本体を読む前の枕的な偈文
なかなか巡り会えないすばらしい教えに出会えた喜びと、その内容をしっかり理解したいという願いを述べています。

誦経（四誓偈）

我建超世願　必至無上道　斯願不満足
誓不成正覚　我於無量劫　不為大施主
普済諸貧苦　誓不成正覚　我至成仏道
名声超十方　究竟靡所聞　誓不成正覚
離欲深正念　浄慧修梵行　志求無上道
為諸天人師　神力演大光　普照無際土
消除三垢冥　広済衆厄難　開彼智慧眼

無量寿経という長いお経の抜粋
阿弥陀様が法蔵時代に立てた誓いに触れた部分。

滅此昏盲闇　閉塞諸悪道　通達善趣門
功祚成満足　威曜朗十方　日月戢重暉
天光隠不現　為衆開法蔵　広施功徳宝
常於大衆中　説法師子吼　供養一切仏

具足衆徳本　願慧悉成満　得為三界雄
如仏無礙智　通達靡不照　願我功慧力
等此最勝尊　斯願若剋果　大千応感動
虚空諸天人　当雨珍妙華

本誓偈

弥陀本誓願　極楽之要門
定散等回向　速証無生身

十念

今日の読経を含め、様々な修行の功徳を、極楽往生のための功徳として回向します。

この十念で往生するぞという意気込みで。

宗祖（元祖）法然上人御遺訓　一枚起請文

唐土我朝に、もろもろの智者達の、沙汰し申さるる観念の念にもあらず。また学問をして、念のこころを悟りて申す念仏にもあらず。ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取りて申す外には別の仔細候わず。ただし三心四修と申すことの候うは、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ううちにこもり候うなり。この外に奥ふ

法然上人のご遺言
浄土宗の教えのエッセンス。

かき事を存ぜば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候うべし。念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし。

証のために両手印をもってす。

浄土宗の安心起行この一紙に至極せり。源空が所存、この外に全く別義を存ぜず、滅後の邪義をふせがんがために所存をしるし畢んぬ。

建暦二年正月二十三日　　大師在御判

摂益文

光明徧照・十方世界
念仏衆生・摂取不捨

念仏一会

総回向偈

願以此功徳・平等施一切
同発菩提心・往生安楽国

十念

・・●

阿弥陀様の功徳は、全ての念仏者をお救いになります。

念仏を称えられるだけ称えます。

勤行の功徳によって、他の人々も往生できますようにと願います。

第二部の終わりの十念

総願偈

衆生無辺誓願度　煩悩無辺誓願断
法門無尽誓願知　無上菩提誓願証
自他法界同利益　共生極楽成仏道

改めて、皆共々で往生・成仏するぞと誓います。

送仏偈

請仏随縁還本国　普散香華心送仏
願仏慈心遙護念　同生相勧尽須来

お招きした仏様に、修行の見守りをお願いし、お帰りを見送ります

十念

〆の十念

龍蔵寺　壇信徒の手引き

発行者　龍蔵寺

埼玉県加須市大門町 18-51

www.ryuzoji.jp

発刊日　平成 29 年（2017 年）9 月 1 日

龍蔵寺　壇信徒の手引き

（平成二九年版）